

農とともに暮らすまち —東京都練馬区における都市農地の魅力創出のための提案及び設計—

BR15059 名倉 未緒
指導教員 鈴木 俊治

1. はじめに

1-1. 研究背景

市街化区域内に存在する農地は「生産緑地」と位置づけられ、営農を継続する代わりに税の減免がなされているが、2022年にその見直しが行われる。これに際し、これからの都市農地に関して、景観形成やコミュニティ形成といった農産物供給以外の機能をどのように保全継承していくかが社会的課題となっている。

1-2. 研究目的

東京都練馬区は23区内で最大の農地面積を有し、農業は区を特徴づける重要な産業となっている。一方、区内の農地面積は減少し続けており、都市農地が担っている多様な機能が失われつつある。本研究では、既存の農地や緑地を活用し、それらが持つ多様な機能を発現させるまちづくり提案により、地元住民の豊かな日常生活の創出に資する事を目的とする。

2. 練馬区の概要と農業の現状

2-1. 練馬区の概要



練馬区は23区の北西部に位置し、23区で最も新しく誕生した区である。緑の多い閑静な住宅街であり、石神井公園に代表される自然環境や、豊かな農地も残されている。

2-2. 練馬区の農業の現状

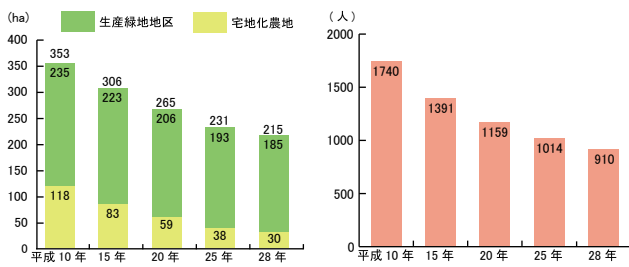


図1より、平成10年からの18年間で約140ha減少していることが分かる。相続発生時の税負担や、生産緑地地区の保全期間の終了に伴う買い取り申出により、農地は今後も減少していくことが懸念される。また図2及び図3より農業従業者数は減少傾向であり、高齢化が進行していることが分かる。

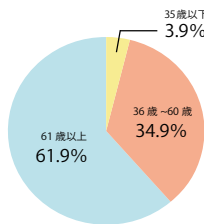


図3 農業従業者の年代別比率 (H26農業経営実態調査より)

3. 対象地概要—練馬区石神井町—

現在JA東京あおば本店が建つ敷地とその周辺エリアを対象地とする。昭和初期頃まではこの地域一帯が農地であったが、昭和43年の都市計画法の大改正により宅地化が進展し、農地は急激に減少した。



画像出典: 地図情報ねりまっふ



4. 対象地及び周辺の土地利用



図4 対象地及び周辺の土地利用・建物用途図

現在このエリアには、小学校や図書館、福祉作業所といった多様な施設が建ち並び、幅広い層の人々が利用している。また自然資源がまとまっており、都市にいながらも豊かな自然を感じることができる。

5. 対象地における問題点

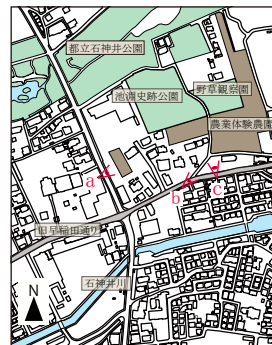


図5 自然資源の位置関係

【自然資源間の連続性の欠落】
対象地およびその周辺には、都立石神井公園を始めとした公園、石神井川、農地といった自然資源が存在している。しかしこれらの資源は分断され、連続性や一体性に欠けているとともに、住民の生活を豊かにすることに寄与していないのではないだろうか。



a地点から見た農地

b地点から見た農地

c地点から見た農地

6.提案

6-1. コンセプト

食事・買い物・仕事・運動等、日常生活の中で行われる様々な活動と農業を掛け合わせ、「農とともに暮らすまち」を目指す。住民はこの地域で暮らすことで生活と農地の関わり合いを認識できるようになる。

6-2. SDGsとの関係



<11. 住み続けられるまちづくりを>

農地を多面的に利用することが持続可能なまちづくりに繋がる。



<15. 陸の豊かさを守ろう>

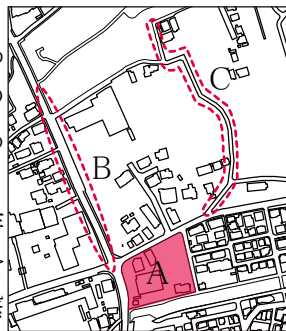
都市農地を守ることは、都市における貴重な緑地や生物多様性の保護にも繋がる。

7.計画概要

7-1.提案内容

【敷地A】

JA東京あおば本店が立地する敷地Aについては、JAが地域の新しい農業の在り方を先導する役割を担うものとして再編する。現在の機能に加えて地元の農作物を味わえるカフェレストランを設け、食を通して住民と農業を繋ぐ拠点とする。その際、石神井川という水辺との関係性を強化し、緑と水を活かした空間計画とする



<敷地A概要>
面積: 3900㎡
用途地域: 第一種住居地域

【BおよびC】

敷地Aと石神井公園をつなぐ幹線道路及び住宅地内の街路であり、歩きやすく、自然を感じながら歩くことを楽しめる歩行空間として改修する。

7-2. 敷地Aの配置計画図



図6 配置計画図(S=1/1500)

7-3.計画イメージ

【直売所併設カフェ】

住民が食事・買い物を通して、地元産の農作物を実際に目にし味わうことができる場所。近くにの畑でとれた新鮮な野菜が住民の食生活を支える。



【直売所前の広場】

現在敷地Aに設けられている直売所では、駐車場を利用して即売会を実施している。直売所の目の前に広場を設け、そこでイベントを実施できるようにすることで、屋外でも安全に買い物ができる。



【歩行空間】

現在歩道が狭く、快適に歩ける状況ではない。敷地の一部を歩行空間として利用し、ゆったりと自然を感じながら歩ける空間とする。

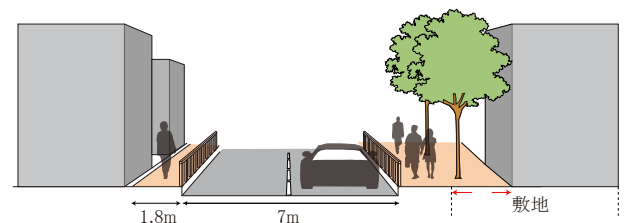


図7 Bの道路断面図

8. 総括

本提案により、住民が日常生活の中で農業や緑をより身近に感じるようになる。そして、これからの都市部における農地や緑地のあり方を考えるきっかけとなる。

【参考文献】

東正則(2014):農業のある都市モデル 小野淳(2018):東京農業クリエイターズ
小野淳・松澤龍人・本木賢太郎(2016):都市農業必携ガイド
都市・農業共生空間研究所(2002):これからの国土・定住地域づくり—都市と農業の共生を目指して—